

里山で哺乳類を調べる意味 ―カメラが映す現状と課題―

すずき さとし
鈴木 聡(学芸員)

里山とはどんな場所？

「里山」という用語自体は江戸時代からありましたが、現代においては、1970年代に四手井綱英が「農用林や薪炭林」と定義したことを契機に、生態学や環境保全の分野で定着しました。その定義は時代や地域によって多岐にわたりますが、ここでは「人の手が入った二次林と、それに隣接する農地や水辺等が一体となった環境」と定義して話を進めます。多くの里山では1960年代以降の燃料革命や過疎化による荒廃が進んでいますが、一方で近年は生物多様性保全の拠点として価値が再認識されつつあります。

里山の哺乳類を調べる

現在、里山に生息する動植物の多くが国や神奈川県レッドリストに掲載されており、絶滅が危ぶまれています。2006年版の県レッドデータブックでは、里山に生息する哺乳類のうち、カヤネズミ、ニホンイタチ等5種がNT(準絶滅危惧)に選定されています。ほかの分類群に比べるとリスト掲載種数は少ないものの、神奈川県に在来陸棲哺乳類は約40種であり、割合としては決して少なくありません。里山では選定種以外にムササビやニホンノウサギ等の確認地点が減少傾向にあることから、絶滅リスクが高まっていると考えられています。

筆者は2019年から秦野市内の里山に生息する哺乳類の生態調査を行ってきました。2023年からは総合研究「神奈川県に在る里山環境における哺乳類及び鳥類相解明の試み」の一環として、自動撮影を主体とした調査を行っています。

なお、秦野市の市街地を取り囲む渋沢丘陵や丹沢山地の山麓部の数か所は、「秦野市域内の里山」として、環境省の生物多様性保全上重要な里地里山に選定されています。秦野市はこれらを含む7か所を「生き物の里」に指定し、環境保全を進めています。

カメラに写った里山の哺乳類

これまでの自動撮影調査で、計13種の

中大型哺乳類が確認されました(図1)。多くの地点でイノシシ、ハクビシ、タヌキが頻りに撮影されたのに加え、丹沢山地のふもとではニホンジカが数多く記録されており、まれにニホンカモシカも姿を見せました。自動撮影画像からの種同定が難しいネズミ類やコウモリ類も写っており、多くの種が里山を利用していることが分かりました。一方、近年全国的に里山への出没が増加しているツキノワグマとニホンザルは、今のところこの調査では記録されていません。この地域では外来種(アライグマ、ハクビシ)および大型哺乳類(ニホンジカ、イノシシ)の防除が行われていますが、依然として個体数は多いようです。なお、県東部で分布を広げている外来種のクリハラリスは、現在のところ確認されていません。

これからも調査を続けていく意味

秦野市の里山で自動撮影調査を本格的に始めてから3年が経ちました。これまでの調査により哺乳類の種数やおおよその生息数の目安が明らかになりました。しかし、里山の環境が変化し続けているため、今後の種構成や個体数は大きく変化する可能性があります。そのため、今後も哺乳類の生息状況をモニタリングしていく必要があります。

全国規模では、環境省の事業として市民参加型調査の「モニタリングサイト1000里地調査」が2005年から行われており、中・大型哺乳類を対象とした自動撮影を含め、植物相、鳥類、カエル類等全部で9項目の調査が実施されています。2024年には、18年間(2005～2022年)の調査のとりまとめ報告書が公表されました(環境省 自然環境局生物多様性センター, 2024)。日本自然保護協会によるデータの分析から、里山において生物多様性の損失が続いており、特に開けた環境に棲む種の減少が顕著であることや気候変動の影響等が見えてきました。哺乳類に関しては、アライグマ等の外来種や大型哺乳類(ニホンジカ、イノシシ)の分布拡大、良好な草原環境の指標種であるニホンノウサギや

カヤネズミの減少が明らかになりました。

全国的な生物多様性の変化の傾向と地域ごとの変化は必ずしも一致しませんが、比較することで地域特有の問題が見えてきます。秦野市の里山での調査をこれからも続けることで、里山の哺乳類の保全に繋がる知見が得られると考えています。

これからの人と里山の関わり方

1960年代の高度経済成長期を一つの転換点として、里山の資源を利用するくらしは全国的に縮小し、人間との関わり方は大きく変容しました。こうした関係性の変化は、里山の管理不足を招き、各地で生物多様性の低下という深刻な課題を生んでいます。生活圏のすぐそばに里山が位置していても、一度も足を踏み入れたことがないという方は少なくないと思います。里山には私有地も多いですが、県内には誰でも気軽に訪れることのできる公園等が点在しています。

現地で哺乳類の姿を直接見るのは難しいですが、足元をよく見ながら歩くことで、動物たちが通った「獣道」、足跡、糞等、生活の痕跡(フィールドサイン)を見つけることができるかもしれません。こうした痕跡を辿ることは、野生動物を知るための第一歩であり、動物たちのくらしを想像する貴重な体験となります。

筆者が野生動物の研究者を志した原点は、幼少期に里山で遊んだ際に芽生えた好奇心にあります。当時の心が踊るようなワクワクした実体験が、今も研究を続ける大きな支えとなっています。

知識として「生物多様性」を理解するだけでなく、実際に現地を歩き、自らの感覚で生き物の気配を探る経験には代えがたい価値があります。目の前の痕跡が「何だろう」と正体を突き止めようとすること、そして「なぜだろう」とその背景を推測すること。こうした実体験を通じて得られる問いや発見は、単なる情報の収集を超えて、自然への深い理解の土台となるものです。次世代を担う子どもたちにも、ぜひ里山に足を運び、五感を通じて未知なるものへの好奇心を大きく育ててほしいと願っています。そこでの発見

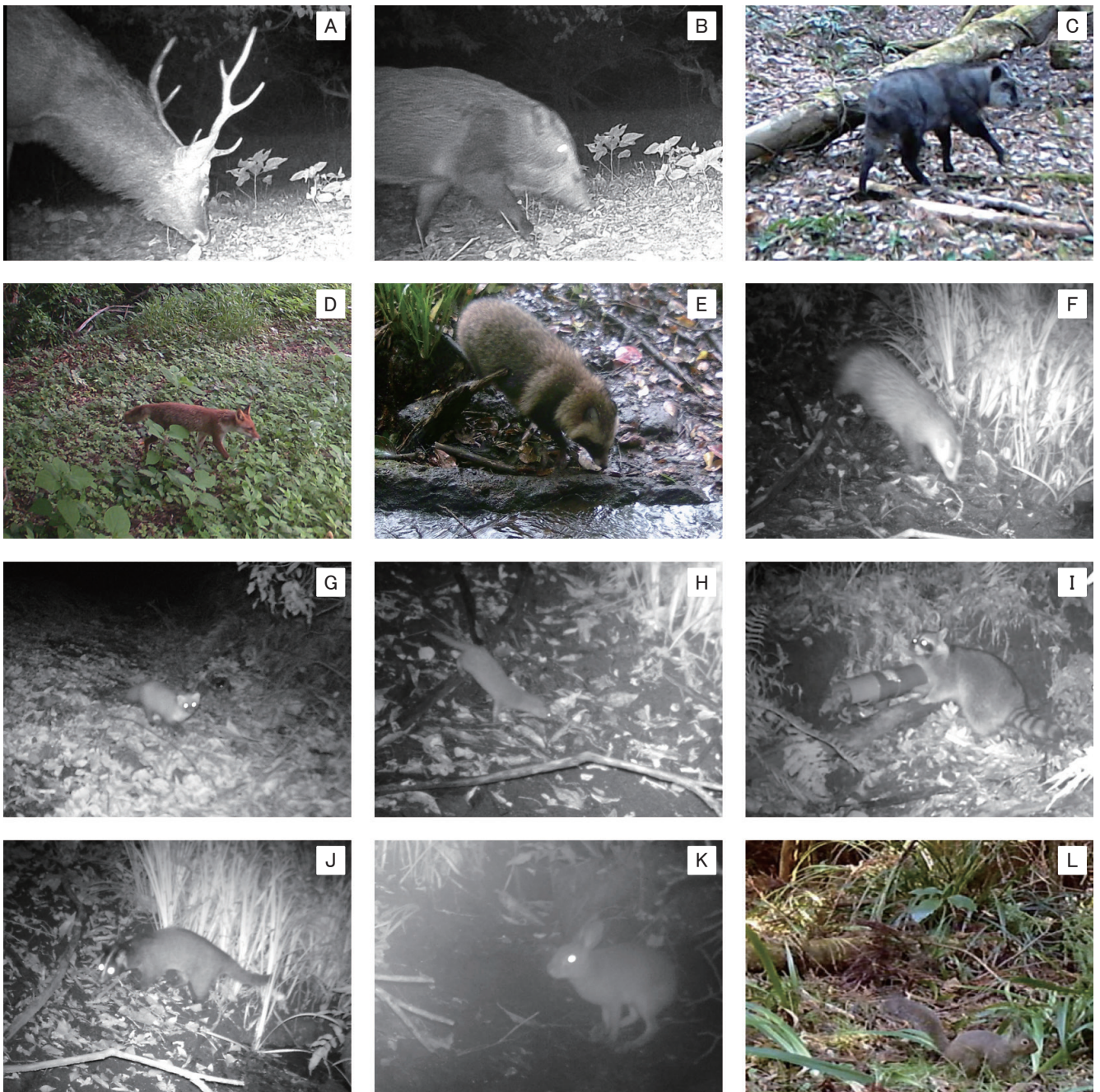


図1. 撮影された哺乳類。A: ニホンジカ *Cervus nippon*, B: イノシシ *Sus scrofa*, C: ニホンカモシカ *Capricornis crispus*, D: キツネ *Vulpes vulpes*, E: タヌキ *Nyctereutes procyonoides*, F: ニホンアナグマ *Meles anakuma*, G: ニホンテン *Martes melampus*, H: ニホンイタチ *Mustela itatsi*, I: アライグマ *Procyon lotor*, J: ハクビシン *Paguma larvata*, K: ニホンノウサギ *Lepus brachyurus*, L: ニホンリス *Sciurus lis*。この他にネコも記録された。

や驚きが、生き物を知る楽しさ、守る心へと繋がるはず。博物館はレファレンスや展示を通じて、そのきっかけ作りを全力でお手伝いしています。

これまでの調査から明らかになった里山の現状を紹介するため、特別展「しらべて分かった！里山にくらす動物たち」(開催期間：7月18日(土)～11月8日(日))を開催します。本特別展では、神奈川県で里山に生息する哺乳類、鳥類をはじめ、両生類や爬虫類、魚類、

昆虫、甲殻類、植物、菌類等について、当館が行っている学術活動の成果を展示します。里山が生きものたちにとってどのような場所であり、またどのように変化してきたのかを剥製等の実物資料の展示や自動撮影画像のスライドショーにより動物たちの生き活きとした姿をお伝えします。

今回展示する資料の数々は、多くの方々の協力によって集められたものです。調査の実施にあたり、秦野市環境共生

課くずはの家、農業振興課農業支援・鳥獣対策担当(はだの都市農業支援センター)および当館哺乳類ボランティアの方々に心より感謝申し上げます。

引用文献

環境省自然環境局生物多様性センター、2024. モニタリングサイト1000里地調査2005-2022年度取りまとめ報告書. 13+153 pp. 環境省自然環境局生物多様性センター、富士吉田。